

2009年12月29日

シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金によるワークショップ  
実施報告書

環境情報学部 加藤文俊

- ・研究題目:体験型ワークショップ:あたらしい「場」の創造(その2)
- ・日時:2009年9月4日(金)～6日(日)
- ・場所:家島(兵庫県姫路市)
- ・参加者:教員 1名 ゲスト講師 2名 学生 18名(塾生 9名;その他 9名)  
          その他 5名  
          ※参加者リストは次頁を参照

## ・内容

本ワークショップは、2008年12月に同基金の支援で実施したワークショップに引き続き、第2回目の企画である。当初は5月末の実施を予定していたが、新型インフルエンザの流行に伴い延期し、再調整を経て9月に実施することになった。

2009年9月4日(金)～6日(日)にかけて、家島(兵庫県姫路市)で、体験型ワークショップを実施した。今回は、「探られる島」プロジェクト(※大阪を拠点とするStudio-Lが、2005年にスタートさせたプロジェクト)に相乗りするかたちで、ワークショップを企画・運営した。参加メンバーは、関西圏から「探られる島」プロジェクトに参加したメンバーが9名、加藤研究室から9名。さらに、ゲスト講師を2名招くことができた。

今回は、家島の人びとのはたらく姿を追い、ポスターを作成する課題を設計した。フィールドワークのすすめ方や写真の撮り方について、レクチャーのあと、学生たちは、2人一組で家島に散り、旅館、造船所、釣り堀、神社など、さまざまな場所へ出かけて、取材をすすめた。この「考えながらつくる」「つくりながら考える」というプロセスこそが、創造的な「場」づくりと密接に関わっている。

ここ数年、調査や活動の成果を、できるかぎり「その場でつくって、その場で還す」というアプローチについて考えてきた。残念ながら、フィールドワークの際にお世話になったかたがたに、お礼のハガキさえ出さぬままのことが少なくない。この問題を解決する、一番シンプルな方法は、成果のまとめを後回しにしないというやり方である。さらに、考えるべきなのは内容や発表の形式である。家島の人びとを取材し、はたらく姿を観察し、その成果をどのようにまとめるかを熟慮し、堅苦しくない、おもしろい形式を模索する必要がある。わかりやすく、家島に残すことのできる媒体として、ポスターがえらばれた。

最終日は、真浦港の船着き場にある待合室に、刷り上がったポスター(計20枚)を掲出した。一時的にこの待合室をギャラリーとして活用し、「いえしまで働く人のポスター展」を開催した。“モデル”になった家島の人びとの前で、ポスターを披露し、講評会・意見交換会を開いて、フィードバックを得た。

なお、本ワークショップの概要および経過については、下記にまとめ、公開している。

<http://vanotica.net/iep1/>

基金は、ゲスト講師(オオニシタクヤ氏)の旅費および施設利用代の一部に充てた。  
(使用明細書を添付)

## ワークショップ参加者リスト

## ゲスト講師

オオニシ タクヤ (launchpad05)

木村建世 (アーティスト)

## 加藤文俊研究室

青木 日登美

青山 貴行

生出 淑子

落合 裕美

加藤 文俊

川島 史

桑子 周造

三枝 峻宏

仲尾 千枝

南 美帆

## 「探られる島・ファイナル」

小代 祐輝

川崎 修良

吉村 大希

永野 裕貴

正田 実知彦

山本 一道

桃野 紀子

塩津 依公子

横井 仁美

## Studio-L

山崎 亮

醍醐 孝典

西上 ありさ

神庭 慎次

井上 博晶